

ハシモト

教授の

あっぱれ

中小企業

政策研究大学院
大学名誉教授
橋本久義



金属の薄板を積層する
新しい成形技術

かのシユバイツァー博士は「本当に幸せな人というのはいかにして他人に奉仕するかを探求し、それを発見した人だ」と言っている。(株)井口一世の井口一世社長もそんな経営者だ。常にユーモアで人を楽しませ、す

ばらしい仕事で社会に貢献する。

一九七八年、立教大学経済学部「麻雀学科」卒（私と同じ部だ）。学生時代から、自分でプログラムを組んでコンピュータをいじっていたという。

二十三歳の時に父親が急逝し、家業の金型プレス業を継いだ。海外シフトが進んで価格競争が激化していく。これでは続けられないと発想の大転換をした。



井口 一世 社長

「量産なら金型プレス、精度を求めるなら切削というのが金属加工の常識でした。しかし、切削は金属くずが大量に出て時間もかかる。そこでレーザー加工とパンチを組み合わせて加工した薄い金属板を等高線のように積み重ねる全く新しい技法を開発しました。作業時間も短く、コストも安い。設計変更にも柔軟に対応でき、少量生産品や試作品から、大量生産まで高価な金型を使わずコストを大幅に抑えて生産できます」

金型レス、切削レスの、金属加工の常識を変える技術だった。

「設計図をデータ化し、ドイツ製の機械に融合させることで高精度を実現した。仮に同じ機械を揃えても真似するのは難しいと思う」と井口社長は言う。

二〇〇一年にプレス屋を廃業。工場も自宅も売って作った二億円を機械を入れ、背水の陣で新創業した。「逃げも隠れもしない」という意味で、社名は自らの名前にした。現執行役員の井口宗尚氏は井口社長の息子だ。「オヤジは私に井口二世という名前を付けようと言ったらいいです。母親が泣いて止めてくれて、助かりました」と笑う。

思い切った試作無料
サービスで普及を図る

当初社員は三名。初年度の売上は給料と材料費に消え、運転資金を質屋から借りたこともある。顧客の信用を得るため、試作を無料で行って新方式のすばらしさをアピールしていった。

「試作無料サービスはいままも継続していて、顧客獲得の有力な手段になっています。難しい開発案件に挑戦すれば、当社内

金型レス・切削レスの夢の新加工法 低コスト、世界一の品質を自負

(株)井口一世 井口一世社長

部に新しいノウハウが蓄積されます。受注につながらなくともいずれ当社に返ってくる。マーケティングの一番効果的な方法だと思っています(井口社長)

社屋のあちこちにポツポツアトが飾られている。優れた技術には芸術的なセンスが必要という井口社長の考えかららしい。創業当初から培ってきた技術をすべてデータ化し、高性能マシンで加工することで、高い精度を実現。医療機器関連、航空機関連等、幅広い分野の顧客のコスト削減に貢献している。

多能工を育成、スキルを
身につけると即昇給

「3Kのイメージを払拭できるように明るい雰囲気心がけました。また住宅街の真ん中にあるので、音や振動を極限まで減らすよう、基礎杭を深く打ち、機械同士振動が伝わらないように工夫しました」と井口宗尚氏。工場内は静粛で、火花や削りくずが散ることもなければ、油の臭いもしない。白を基調としたオフィスは清潔感にあふれて、

同社の社員は三十名。平均年齢は二十九歳の小所帯ながら、売上は約七十八億円(二〇一七年度)だ。社員の八割が女性。文系学部の卒業生が大半という。「選考の結果、女性が多く残りました。いちばん重視したのはEQ(感情知能)です。いまは技能がなくとも、その人に徳があれば、周囲が自ずと教えてくれ、短期間で習得できます。まったく新しい技術なので、なまじ知識や先人観がある

はEQ(感情知能)です。いまは技能がなくとも、その人に徳があれば、周囲が自ずと教えてくれ、短期間で習得できます。まったく新しい技術なので、なまじ知識や先人観がある

FC制で新技術を
世界に広める夢

二〇〇六年には「第一回渋沢栄一ベンチャードリム賞」奨励賞と「第六回ビジネスプランコンテスト」関東経済産業局長

●(株)井口一世

(本社) 東京都千代田区飯田橋4-10-1
04-2299015400
(所沢事務所)
<http://iguchi.ne.jp/>



所沢の新工場と製造風景